

『身近な仏教用語』に学ぶ真宗入門』

二〇二〇八月月二三日（土）
万行寺住職・東京仏教学院講師・NGOアーユス理事 本多静芳

第五回 「平和を生み出すのは祈りか／桃太郎から考える【一水四見】」

はじめに／共通感覚

・八月十五日：何と呼ぶ日か？ 久米宏さんのサイト「ノックノック」2020-08-05Kume*Net

同じ出来事：まったく違って見える 何故か？

・「時代の共通感覚」のメルクマール（判断基準）

・CCR『雨を見たかい？』

一、桃太郎／諸法無我

・テーマ「しあわせ」 日本新聞協会広告委員会最優秀賞「めでたし、めでたし？」

・諸法無我―すべては他の存在との関わりで成り立つ

―自分の都合でモノゴトをとらえ、相手の立場を考慮することができない

―そのものの見方で、相手を傷つけ、自分も振り回されている

―それ以上ものを考えなくなる甘えた自分がいる

仏教 ―自分の姿を教える

浄土真宗―念仏は私に「気づけよ、目覚めよ、身の程知れよ」と呼びかけ

私の生き方を根底から、それでいいのだろうか、揺さぶりがける



二、一水四見く私は何を見ているか 拙著『心を豊かにする』62のヒント』ゴマブックス

・唯識ゆいしきという学び

一水いっすい—同じ水

四見しけん—畜生—魚（水の中の生きもの）—「棲みか」

—餓鬼—貪り—炎の燃え上がる「血の膿」

—人間—「飲み物」

「天人—天から見える地上の池の水」—「宝石で出来た鏡」

その立場、その人の心の動き—まったく違って見える、現実と違うものに見える

「手を打てば 鳥は飛び立つ 鯉は寄る 女中茶を持つ 猿沢の池」

「世の中には、なんて沢山の妊婦さんがいるんだろう、と自分が妊娠してみて、はじめて気づきました」

自分の関心に合わせて見ていた、自分の都合でものごとは見えている

よしあしの文字をもしらぬひとはみな まことのこころなりけるを

善悪の字しりがほは おほそらごとのかたちなり 正像末和讃『註釈版聖典』六二二頁

・お寺の掲示板「憎い人など 一人もいない 憎いと思う 私がいるだけ」

一九七一年ヒット曲「あの素晴らしい愛をもう一度」

あの時 同じ花を見て

美しいと言った二人の

心と心が 今はもう通わない



三、分かっていないことのわからなさ／善と悪

七高僧—中国の曇鸞大師（四七六〜五四二）『往生論註』

蟪蛄けいこしゅんじゅう春秋を識しらず、伊虫いちゅうあに朱陽しゅようの節を知らんや 「信巻」『註釈版聖典』三〇一頁

蟪蛄—蟬 夏に生まれ、夏に死んで行く—春も秋も知らないという故事

—伊虫、この虫、蟬—朱陽、夏そのものを知っていると言えらるだろうか

蟬は、夏とは違う春や秋を知らない↓本当は、夏ということも知らないという事実 たとえ話

—人間も、迷いの世界、自己中心の生き方しかしていない

↓自分の生きている世界、自分の生きている姿も分かっていないということです。

いまの自分の生き方とは違う、生き方がある—ということに気づいていない

世間の常識と仏教・浄土真宗の教え

世間の常識と自分が大切にする仏教の教え—まったく同じか？

世間の常識と仏教の教えがまったく同じなら↓わざわざ仏教を学ぶ必要はない

自分が仏教を学び、これこそ本当のよりどころだと実感できたとき

仏教の教えと世間の常識が同じでないなら↓当然、私自身の中に葛藤が生まれる

この葛藤を通して「心」が育つと教えている

仏教の善とは：惡を避けること—十善とは、不十惡訓あふじやく身体しんたいと信業しんごうにころの三業（身・口・意）

十惡＝殺生・偷盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪欲・瞋恚・愚痴

↓平和を生み出すとは？ 善が、不十惡なのだから……

↓戦争に向かわない生き方—不戦、非戦、非暴力……



四、『親鸞と戦争を痛む』

亀井鑛先生『親鸞と戦争を痛む』大法輪閣、九五頁、一九九八年刊行。

「仏の国に軍兵無用　く戦時中に戦争反対した仏者たち」

国歌総ぐるみの苛酷きわまる思想統制が布かれる中で。かつての国をあげての迷妄流転は、千幾百年を過ぎたついでにないだぜでも、同じく国をあげての妄執流転の中で、われら民衆は呻吟し、悲痛して、われとわが生命を屠って屠って、今に目覚めることがない。

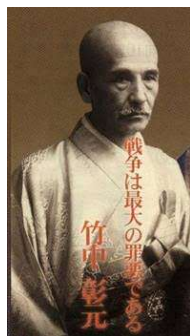
そんな中で、仏法を学び、仏法を信じ、仏法に生きる依り所を托する仏教者念仏者の中に、仏教の信念から、戦争を誤りと難じ、軍隊を無用と批判してはばからぬ人がいた。

・ 仏法では戦争は悪事 『無量寿経』^{ひょうがむよう}「兵戈無用」

岐阜県不破郡の真宗大谷派明泉寺の先々代、竹中慈元住職（昭和二〇年七九歳没）だ。

・ ひるまず非戦主張

その人となりは謹厳廉直。酒はほとんどたしなまず。胃弱だったので食事は時間をかけてよく噛んで食べたという。勤行は朗々として悠揚迫らず、法話はおおむね小難しいが、情味がこもり、坐臥つねに泰然自若といった風があった。



・ 天照大神も迷いの凡夫

一民族信仰の枠をでない神である限り、相対有限の存在であり、迷界を出ないと言うべきは当然だろう。仏教以前のインド・バラモン教の蛮神と同類なのだろう。 初出 月刊『大法輪』平成七年十一月号

まとめ 戦争に対して非戦、非暴力が貫かれる

世間の常識と仏教の教えの葛藤に生きる↓こうしろという話ではない―私は、これでいいのかという心
祈りだけでは平和は生まれないが、仏教をより所にした祈りなしには、平和への歩みは生まれない

